

福岡県瀬高町におけるそさい生産構造

上原三郎*・和田武利*

UEHARA, S. and WADA, T.

Conditions of Vegetable Growing in Setakamachi, Fukuoka Prefecture.

1. はじめに 瀬高町は白菜の特産地として発展してきたが、この町のそさい生産の構造、解決すべき問題点等明らかにされていない。これ等の点を明らかにするため本調査を行った。

2. 調査地の位置、概況 瀬高町は筑後平野の東南部、矢部川の下流に位置し、矢部川流域に 150ha の畑地が開け、ここでそさい生産が発展してきた。町には道路が四方に伸び、鉄道は鹿児島本線、佐賀線が走り交通の便は良好である。

*福岡県農業試験場

調査部落の概況を示せば第1表のとおりである。畑地は矢部川流域の7集落に偏つて分布している。

第1表 調査部落の概況

部落名	項目	農家数			畑地			牛	馬	乳牛	耕耘機
		戸	ha	ha	ha	%	頭				
本郷	戸	190	77	54	131	41	42	17	1		
作出	戸	41	25	18	43	43	12	19			9
文広	戸	61	33	20	53	37	38	5			3
計	戸	292	135	92	227	40	92	41	1		12
瀬高町合計	戸	1642	1150	145	1296	11	317	132	17		240

3. 山門郡におけるそさい生産の発展 この町の畑地帯の土壌は極めて肥沃であり、加えて山門郡は明治19年から旧藩主の手によって三橋町に農場を経営し、各種の試験を行い、特に園芸に関しては力を入れてきたため早くからそさい園芸が発展してきた。

白菜の導入がはじまつた大正5年を100として畑作物の変遷を見ると、県全体では雑穀21%、豆類43%

と夫々減少し、葉菜、果菜類は漸増している。

山門郡では雑穀、豆類は夫々9%、26%と急激に減少し、これに反して葉菜、果菜類は変動はあるが夫々県全体より増加率は大きい。特に白菜の産地として名を挙げてきた大正末期から昭和初期にかけては2倍以上に増加し、最盛期の昭和14、5年頃には約3倍になっている、この時期には畑の約8割に白菜が作付されていた。

戦後の最盛期は昭和24、5年頃で、その最盛期は2~3年続き、26年頃から病虫害の発生が多くなり品質、収量ともに年々低下し作付面積も減少してきた。そのためほうれん草、ねぎ等の軟弱そさいへ作付転換しており、最近輸送手段が発達してきたため近郊的園芸の型態を表してきた。

4. 調査農家の経営概況 調査農家の経営概況は第2表のとおりである。

第2表 調査農家の経営概況 (1戸平均)

部落名	項目	調査農家数	家族数	労働能力	田	畑	計	耕地の分散度			家畜			大農具	
								~500	500~1000	1000~	役牛馬	鶏	その他	オート三輪	耕耘機
								%	%	%	頭	羽			
本郷	戸	6	8.3	3.3	74 ^a	39 ^a	113 ^a	41.5	29.5	29.0	0.8	22	—	—	—
作出	戸	4	7.5	2.3	77	64	141	54.6	45.4	—	1.0	5	—	0.8	0.5
文広	戸	5	10	4.1	96	54	150	47.3	26.7	26.0	0.8	23	山羊1 綿羊2	0.8	0.6

耕地の分散状況は作出は1km以内にあり、本郷、文広は1km以上離れた場所に約3割を所有しており、特に本郷は矢部川を渡つて2kmも離れた園場もある。条件としては作出が最も恵まれている。

大農具の耕耘機、オート三輪は作出、文広に集中的に導入されている。

5. そさい生産の技術上の問題点 経営上の問題点として次の如き点が考えられる。

過去30年という長い間白菜—高菜—果菜類という作付体系をとつてきたため、土壌条件は悪化し、忌地の現象が現われ病虫害の発生が多くなつてきた。その対策としてある農家は白菜収穫後天地返しを行つており、又ある農家は白菜に代るほうれん草、ねぎ、甘藍、人参等へ作付転換している。

その他、秋冬作から夏作に重点を移し、トマト、きゅうりの無加温ビニールハウス栽培から、ボイラーを焚く加温栽培へと集約化の方向に向つている農家もある。しかしビニールハウス栽培は極めて集約的な栽培法であり、自家労働力を主体とする瀬高町のそさい栽培農家ではその規模は330m²が限界である。そさい栽培

農家といえども水田を60%前後を所有しており、経営規模も大きいため集約化の程度にも自から限界ができてくる。ある農家は畑面積を昭和28年の半分に減少し夏果菜類を非常に集約的に栽培し、そさい作部門の粗収益は反つて倍以上になっている。

6. そさいの収益性 そさいの収益性は種類によつても栽培方法の違いによつても大きな差がある。トマトのビニールハウス栽培は3.3m²当り800~1,100円の経営費と0.7~1.2日の労働を要し、純収益は反つて赤字となつているか、辛うじて経営費を償つてにすぎない。ボイラーを使用する集約的な促成栽培では3.3m²当り純収益260円をあげ有利になつているが、1日当り労働報酬は293円と極めて低い。きゅうりの半促成栽培は3.3m²当り純収益は593円をあげ、1日当り労働報酬は800円になつている。白菜はa当り800kg程度の収量はあがるが価格変動が甚だしく、昭和32年で純収益2,400円程度に過ぎず、1日当り労働報酬は1,000円となつている。

農家別にそさい作部門の粗収益をみると50万円前後の農家が数戸あり、中には70万~100万円を超える農家もあるが最近粗収益の増加が停滞している。

7. むすび 輸送園芸であつた白菜が極度の連作により不作となり、それに代つて近郊的園芸作物の作付を見るようになった。そさい園芸の発展段階としては輸送園芸から近郊園芸に向うのが進歩の方向である。しかし近くの市場は農村都市であり、大牟田市にしても70万の人口で今後消費の伸びは期待できない。これに反し北九州、福岡等は大きな消費人口を容し、今

後も消費は伸びるものと思われる。瀬高町としては、過去において瀬高白菜で名を挙げた有利性を生かすとともに、大消費地の嗜好や需要の動向を研究し、より一層有利な販路の開拓、拡張を計るため完全な共同出荷体制を整えるとともに新しい技術、例えば畑地灌漑等を取り入れ生産力の増強を計り、優良なそさいの生産に努めなければならない。